

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

もう一つの発掘：モスコソさんとの出会い (巻頭エッセイ)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008362

[巻頭エッセイ]

もう一つの発掘

—モスコソさんとの出会い—

関雄二（国立民族学博物館教授 アンデス文明研究会顧問）

これから紹介する発掘の話は、心躍るロマンの世界を求めて、古代文明の世界へと誘うはずの雑誌の巻頭には、似つかわしくない話かもしれない。しかし、その歴史と記憶は決して忘れてはいけないし、観光に臨む際にも、知っておくべき知識であろう。ここでいう、われわれ考古学者のものとは一風異なる発掘とは、中米グアテマラで起きた内戦下で虐殺された人々が眠る秘密墓地の発掘である。

今から3年ほど前、国際交流基金の招いでグアテマラにある国立考古学民族学博物館に展示指導に赴いたときに、当時の館長フェルナンド・モスコソさんに出会った。

口ひげを蓄えた穏やかな表情を見せる、私と同輩の紳士であった。このときは、指導がさほど難しくなるとは思ってもみなかった。ちょうど大規模な改修計画を考案中であった博物館側は、私の助言を期待していたように思えた。そこで、展示のコンセプトや博物館の使命や役割について館員とブレイン・ストーミングすることにしたのである。大半の展示物がマヤ文明などの考古学的遺物であるから、議論は錯綜するはずもないと高をくくっていた私には、大変衝撃的な提案が示された。それは、1996

年、内戦の終結のため、政府とゲリラ勢力との間で交わされた和平協定に示された忍耐、和解、寛容、インテルクトラリダ（interculturalidad）といった概念を展示の中で実現したいという希望であった。

インテルクトラリダとは、英語のインターカルチャーと同義で、間文化性といった訳語が使用されることもある比較的新しい概念である。多文化共生に近いものの、もう一步踏み込んで、文化間の相互理解と互いの文化の尊重を強く訴えているように思える。たとえばグアテマラの場合、20を超えるマヤ系先住民集団に加え、古代にメキシコから移住してきたシンカ、アフリカ系奴隷の子孫達ガリフナといった集団が存在しているが、彼らと人口の大半を占める混血ラディーノとの共生を図るばかりでなく、先住民集団同士の相互理解を深めていくことが主眼の一つといえる。もちろん言葉の通じない場合もあるだろうが、そのときに役立つのが、皮肉なことに支配的言語であるスペイン語であり、この活用は決して否定しないのである。要するに、ラディーノや白人による先住民への差別や不寛容こそ、内戦の大きな要因であったから、これを正す必要があるという論理である。こう

した政治的動向は、多少知っていたとはいえ、まさか国立考古学民族学博物館の館長から聞くとはいってもみなかった。

この謎は、指導の合間に交わした雑談の中から、やがておぼろげながら見えてくる。グアテマラのサン・カルロス大学で人類学を専攻し、マヤの遺跡の発掘に参加してきたモスコソさんは、やがて、その知識と経験を買われ、内戦の犠牲者となった人々が眠る秘密墓地の発掘に従事するようになったのである。さらに米国のスタンフォード大学で法人類学の修士号を獲得し、内戦後のコソボでも秘密墓地の調査に加わることになる。グアテマラの場合、文化人類学や考古学は法人類学と強く結びつき、また職の市場としても大きいのは、内戦と結びついているからである。

とはいえマヤ文明で有名なグアテマラでは、悲惨な内戦の経緯については、日本で知られているとはいえない。グアテマラの国土面積は10万8889km²、日本の約3分の1、人口は2000年現在で1188万人を数え、国民の56%は貧困層、16%は極貧、先住民の78%は貧困層にあたる。

中米では、1960年代以降、キューバ革命の影響を受けて左翼運動が誕生し、これを自由主義陣営のアメリカ合衆国が介入するというイデオロギー的対立が長く続いた。グアテマラもその例外ではなかった。1996年に国連の仲介でゲリラ側と政府とが「和平協定」を締結するまで36年間も内戦が続き、その間20万人以上の死者・行方

不明者（国連推定）、150万人の国内難民、15万人の国外難民を出したとされる。ここには、1982年のわずか8か月間に虐殺された7万5000人という数字も含まれる。なお被害者の多くはマヤ系先住民であった。

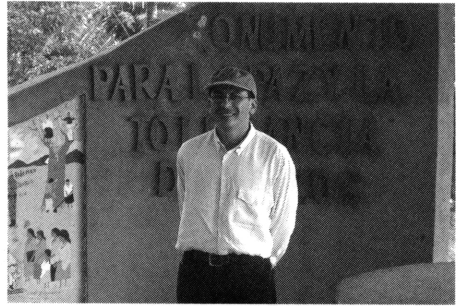
「和平協定」には、人権回復や難民問題、先住民文化の保全や諸権利などさまざまな内容が盛り込まれ、これを遵守、実現すべく、政府はもとより国際社会は支援を公約した。その結果、NGOラッシュともいえるほど数多くの開発プログラムが導入されたのである

こうした中で、モスコソさんが従事する秘密墓地の発掘の意味は大変大きい。マヤ人の死生観では、死体が遺族の元に返らなければ、魂の安らぎは得られないという。その意味で、遺体を掘りあて、残った骨や衣服を集め、遺族へのインタビューから遺体の同定を行う作業は、必須ともいえる。もう一つ大事な点は、法人類学的知識を用いて、虐殺の状況を復元し、加害者を割り出すとともに、被害者遺族への補償材料とすることである。ただし、これが実は大変難しい。すでに述べたように、グアテマラでの虐殺そのものが、軍事政権による国家的犯罪であることは認められてはいるが、実際に手を下したのは、軍部に先導された農民自警団であるケースも多く、軍に追及の手が伸びる場合は皆無といってもよい。下手をすれば、軍の当事者は野放しのまま、村人同士の法廷での争いとなり、村落組織の分裂を呼び起こさないでもない。

モスコソさんは、これまで数々の法廷で証言に立ち、悲しくも骨と化した犠牲者の声を代弁してきた。それがゆえ、加害者か軍かわからぬ闇の圧力を受け続け、その飄々とした態度とは裏腹に、暗殺の脅迫をたびたび受けている。コスタリカにある国際人権裁判所は、グアテマラ政府に対して、護衛の警官を彼につけるように勧告し、現在は、護衛とともに行動している。

昨年3月、東京大学の石田勇治教授がリーダーとなって進めている「ジェノサイド研究の展開」の協力を得て、モスコソさんを招へいすることができた。そして私の所属する国立民族学博物館と東京大学とで開催されたフォーラム、シンポジウムへの参加が実現した。シンポジウムでは、モスコソさんの活動がつぶさに報告され、また後日、北朝鮮から横田めぐみさんのものとされた人骨を鑑定した日本人法人類学者や法務省研究所関係者とも親交を深めた。尊き行動に身を投ずる人を守っていくためには、警察の護衛以上に国際的世論を味方につける方が効果的なのである。

モスコソさんの発掘は、今は休止中であるが、自らが率いるNGO (Historial para la Paz) は、虐殺された人々の遺族や生き延びた人々の声を集め、各地に資料館を建設するプロジェクトを推進している。今年2月に虐殺現場を訪れた私は、ヨーロッパ共同体などの支援を受けて彼が建てた博物館に展示された写真を前に、遺族や生き延びた人々と対面する機会を得たが、高ぶる気



グアテマラ中部バンソス村に建立された虐殺モニュメントに佇むモスコソさん

持ちからスペイン語での語りが困難になる彼ら、彼女らの姿を見て嗚咽をこらえることができなかった。

だからこそ帰国直前に、批判的な意味で、友人に勧められて観た映画「アポカリプト」(メル・ギブソン監督、日本上映は5月)には腹が立った。そこで表象された古代マヤ社会の残虐さは、考古学的にみても、一概に否定できないにせよ、その映画を生み出した米国自体の介入も要因の一つとなった大量虐殺の事実にも目を瞑(つぶ)り、残虐さのイメージを先住民社会だけに押し付ける近代西洋の傲慢さにはあきれられるしかなかった。よしんば、事実を覆い隠す意図などなかったとしても、ハリウッドの巨大な資本と宣伝力の前では、グアテマラの虐殺がかすんでしまうことは間違いない。

なお、ここでとりあげたシンポジウムについては、朝日新聞でも報道されたが、現在、出版を準備しているところである。モスコソさんの活動を日本に周知することは、考古学の社会的還元とともに、私の役目だと考えている。